『児雷也豪傑譚』における各編の作者と「嗣作」

大関綾

はじめに

『児雷也豪傑譚』は天保十年（一八三九）～慶応四年（一八六八）まで約三十年に渡り刊行された全四十三編の長編合巻であり、美図垣笑顔（一七九一―一八四六）、一筆庵主人（渓斎英泉、一七九一―一八四八）、柳下亭種員（一八〇七―一八五八）、柳水亭種清（一八三三―一九〇七）の四人によって書き継がれた作品である。いずれの交代も作者の死没によるものである。

三番目の作者柳下亭種員が二十五編序文に

宋沈俶諧史曰、京城闤闠之区窃盗極多中略以粉書我来也三字於門壁と。故人漫亭鬼武子の綴れし物の本に強盗の名を自来也とせるは、彼諧史にやよれるならん。其は兎も角も、此児雷也は雷を捕へし童の事にて、云々の名をかうむらせるは実に原稿の主なりし美図垣大人が一世の手柄。

と記すように、宋沈俶の『諧史』にある、窃盗を行うと門壁に「我来也」と記した盗賊の話を基にして、漫亭（感和亭）鬼武が読本『自来也説話』（前編文化三年（一八〇六）刊、後編同四年刊）で自来也という名の盗賊を主人公に据えた物語を記した。『児雷也豪傑譚』はこの自来也をモデルにし、幼少期の逸話などを盛り込むことで合巻化した作品であり（一）、『自来也説話』後編の趣向を随所に取り込みながら、その前編の主筋である勇侶吉郎が親の仇である軍太夫を討つという話を引き入れる。この話は本作において捨松が軍太左エ門を討つという話に該当し、十編までの一つの柱となる話である（二）。読本に依る趣向が見られるのは十編までであり、これは全体の約四分の一に過ぎない。『児雷也豪傑譚』はその後に挿入される趣向によってさらなる長編化が可能になったのである。

それは、『児雷也豪傑譚』の代名詞とも言える「三すくみ」の趣向である。その中でも十二編から新たに登場する大蛇丸は重要で、佐藤至子『児雷也豪傑譚』「解説 一 成立――作者と構想（二）構想」（三）に「十二編序文で自ら述べるように「販元の御見立」で「嗣編の註文」を受けたという種員にとっては、人気のある長編合巻をさらに長編化する方法を探ることが最大の課題だったと思われる。その点において、大蛇丸を登場させたことはきわめて有効であった。」とあるように、種員が十二編以降大蛇丸を登場させ、児雷也と大蛇丸の対立構造にしたこ

とは『児雷也豪傑譚』の長編化を論じる上で最も重要な要素である。しかしながら、視点を転じると、何故種員が書き継いだばかりの十二編で全く新しい趣向を取り入れても破綻なく物語が展開されたのであろう、という疑問が生じる。『児雷也豪傑譚』の十編では読本由来の話、十一編では「〈蛇の怨念が人間に憑いて児雷也につきまとう物語〉」[四]が決着を見ており、十二編以降の大蛇丸の物語を円滑に始めることが出来ている。これは単なる偶然なのであろうか。本稿では、これまで問題視されていなかった、一筆庵主人没後に刊行された十・十一編を中心に、これらの編を一筆庵主人作として差し支えないのかを検証したい。

一、各編の作者

三すくみの趣向の挿入過程を調査するには、まず、作者がそれぞれ何編の著述を担当したのかを確定する必要がある。『児雷也豪傑譚』十二編序文（嘉永三年刊）には、柳下亭種員が次のように記す。

過歳天保己亥の春、美図垣といふ戯作者の太夫職、児雷也の初編を著述しゝに、ひく手許多と流行、直に二編の裏約束、三編四編と巻を追、頗江湖に全盛なし、第六編より殊に作意も勝るゝ松の位、一筆大人がこれを綴継、通路繁き十一編、看官佳境に至りしが、彼両個の鳳妓達つゞいて苦海の季明となり、販元の御見立にて、拙子に嗣編の註文がかゝりぬ。

『児雷也豪傑譚』十一編までの各冊終丁裏には作者として美図垣笑顔の名が記されるが、七編以降の序文に名前の見える一筆庵主人が美図垣笑顔の後を書き継いだ旨が種員によって明確に記される。この作者の継承の問題に対し、『日本文学大辞典』「児雷也豪傑譚」項[五]では、

【作者】美図垣笑顔（自初編至五編）。一筆庵主人（自六編至十一編、六・七編は遺稿によったものらしい）。柳下亭種員（自十二編至三十九編、三十九編は遺稿）。柳水亭種清（自四十編至四十三編）。

『日本古典文学大辞典』同項[六]では、

四十三編各編四冊合二冊。合巻。美図垣笑顔（初—五編）・一筆庵主人（渓斎英泉、六—十一編）・柳下亭種員（十二—三十九編）・柳水亭種清（四十—四十三編）作

と、両書共に六編以降が一筆庵主人の作だとする。佐藤至子『児雷也豪傑譚』「解説　二成立——作者と構想（一）作者」[七]では、

以上（表紙・見返し・巻末署名にある名前：稿者注）をまとめると、初編～六編は美図垣笑顔作、七編～十一編は笑顔の遺稿に基づき一筆庵主人作、十二編～三十六編は柳下亭種員作、三十七編～三十九編は種員の遺稿に基づき柳水亭種清作、四十編～四十三編は柳水亭種清作となる。…

前述のとおり、六編そのものに一筆庵主人の名前を見出すことはできない。ただし、序が文章ではなく漢詩と発句であることについて、笑顔の死去により通常の序文を用意できず、急遽漢詩と発句で体裁を整えたと考えることも可能だろう。それをおこなったのが一筆庵主人だとすれば、かれが六編から嗣作したと見なすことは間違いとは言えな

い。

と、表記に基づくと七編以降が一筆庵主人の作と考えられるが、六編の序文が他の編とは異なる形式であることから、六編から一筆庵主人の作とみなすことも出来るとする。

このことに関連して、五編は見返しの年記によると天保十五年刊であり、美図垣笑顔の生前刊行ではあるが、序文は板元の甘泉堂（一筆庵主人筆）によるものである。天保十五年は天保の改革と同時期であり、同編の改題改修本（『緑林豪傑譚』、序文楓川市隠〈一筆庵主人〉）が弘化三年に刊行されることから、五編の板元による序文は後に差し替えられたものなのであろうと考えられている（八）。六編と五編の改題本が同じ弘化三年に刊行されることも、六編より一筆庵主人が本作に関わりのあったとされる要因である。

十二編の序文からは「第六編」から「通路繁き十一編」までが一筆庵主人が書き継いだことを示すものと読める。ただし十一編に差し掛かり、「彼両個の鳳妓達つゞいて苦海の季明」となったと読むと、十一編が別の人物による作であった可能性も生じる。十・十一編は嘉永元年春脱稿と序文や見返しに記されており、一筆庵主人は嘉永元年の七月に死没していることから、一筆庵主人の原稿が出来上がっていたことは確かではあるが、嘉永二年正月の刊行までに、別の人物による校閲で多少なりとも手が加えられた可能性を完全に排することは出来ない。それでは、実際には何編がどの作者の手によるものなのだろうか。

ここで、柳下亭種員が記した『児雷也豪傑譚』二十編序文を次に掲載する。この序文は前作者の嗣作における齟齬を列挙しており、誰が何編の著述をしているかを判断するには格好の素材と考えられる。なお、引用に際し、齟齬を指摘しているもの毎に番号及び傍線を付した。

前巻にも言、此書元稿は美図垣大人にて、中頃は一筆菴の著述なり。綴継ゆゑにや、英泉子に至て文中聊誤あり。①一度児雷也が手に帰入薬籠を勇見之助が復所持し、②殺害されし母梢を存生様にいひ、且③尾形弘純は筑紫の城主と二編にあるを越後の領主なりとせり。予は笑顔子の条に倣て、則肥後の国人とす。此他④初編に紛失まゝなる吹雪形染の茶入をいだし、⑤五編より後行衛闇老婆於強を尋て用ゐ、彼是と補綴すれども、恵吉といふは弘行が義理ある娣深雪が偽名、そを別人のごとくしるせし、これのみは亦補正がたし。…

①の「一度児雷也が手に帰入薬籠を勇見之助が復所持し」に関しては、五編で一度児雷也に戻ったはずの印籠が七編でまだ勇見之助が持っていたという齟齬を指摘する（九）（五編＝笑顔作、七編＝一筆庵作）。②の「殺害されし母梢を存生様にいひ」というのは、六編で討たれたはずの梢が八編の児雷也の発言からまだ生きているように描かれていることを指摘する（十）（六編＝笑顔作、八編＝一筆庵作）。③の「尾形弘純は筑紫の城主と二編にあるを越後の領主なりとせり。予は笑顔子の条に倣て、則肥後の国人とす。」とは、児雷也の父尾形弘純が二編では筑紫の城主、七編では越後の領主とされており、齟齬が生じているため、種員が十八編で筑紫（九州）の中でも肥後の国の城主としたことを記す（十一）（二編＝笑顔作、七編＝一筆庵作、十八編＝種員作）。④の「初編に紛失まゝなる吹雪形染の茶入

をいだし」や⑤の「五編より後行衛闇老婆於強を尋て用ゐ」は初編や五編において笑顔が創出した趣向、特に勧善懲悪に関する事柄が決着を見ていないため、種員がそれらを再度物語に登場させ、終結させたことを記す（十二）（初・五編＝笑顔作）。

これらの柳下亭種員の指摘から、先行研究では六・七編は笑顔の遺稿に拠った一筆庵の作であるとされるが、六編は笑顔の稿本に多分に拠っていたこと、七編の齟齬が含まれる話は一筆庵が新たに加えた趣向である可能性が高い。

引用末尾に「恵吉といふは弘行が義理ある娣深雪が偽名、そを別人のごとくしるせし、これのみは亦補正がたし。」とあるように、嗣作に際して、登場人物を勘違いして話を継いでいる場合は補正するのが難しいとある。本来同一人物である恵吉と深雪が別人として登場するのは七編から九編のことであり、この挿話も一筆庵の創作であると言えるであろう。

七編においては先述の誤りのみでなく、登場人物名の誤りもみられる。姫松須磨太郎を「すまの介」と表記する箇所が三箇所、尾形弘澄を「弘廉（ひろかど）」とする箇所が四箇所見られる。その後の編ではいずれも元の表記に戻ってはいるが、これらの誤りは作者が代わって間もない頃に執筆されたために生じたものだと考えられる。

同様に十一編でも梢という人物名を「あづさ」、更科判官満明を「てるとき」と誤表記しており、十編以前に登場する「菖蒲」と「多金」という人物名の逆転も見られる。笑顔から一筆庵の作へと移行したと考えられる七編と同じく、作者の移行があったことを思わせる誤りがあることから、一筆庵主人の作として扱われる十一編で、すでに作者の交代が行われていた可能性はないだろうか。しかしながら、先述の通り、十編と十一編は共に一筆庵主人によって嘉永元年の春に脱稿した旨が記される。そこで、十一編には七編に見られたような内容の齟齬などが指摘できるか、作者の交代の跡がみられるか、次に精査していきたい。

二、十編、十一編について

二―一、十編の稿本について

十一編について分析する前に、まずは十編について言及しておきたい。一筆庵主人筆の『児雷也豪傑譚』十編上下冊の稿本が天理大学附属天理図書館に所蔵される（十三）。この稿本と刊本との異同を確認してみると、話の展開に関わるような違いはないものの、言い回しなど書き換えられた箇所が全体の二割（十四）を占める。同時期の一筆庵主人筆の稿本に関して、刊本との異同が多い意味合いについては別稿（十五）で論じた。一般に稿本と刊本では異同がほぼ見られないため、本作において多く校訂箇所が見られるのは、一筆庵主人の没後、刊行までに別の人物が校正を行った可能性が高いと考えられる。一方、十一編の稿本は現在のところ見つかっておらず、稿本から作者を判別することは不可能である。

十編の稿本と刊本とでは内容に関わる異同は見られず、十編は一筆庵主人の遺稿に基づき刊行されたものである。また、校閲が別の人物によるものであっても人物名の混乱は生じていない。そのため、十一編で十編以前との人物名の混乱が見られる

のには、校閲者が別である以外の事情があると推測される。そこで次に、十編までの話と十一編の内容との繋がりを精査する。

二―二、十一編の内容と前後との繋がり

十一編の前後との繋がりを検証するにあたり、十一編の要約を次に示す。

イ わずか四歳の捨松が、自らの肉親で信濃国更科家家臣の姫松親子らの敵荒九郎を討ち果したことにより、更科家は捨松に家名を相続させようと、鎌倉まで迎えをよこす。しかし、鎌倉から信濃までの道中、捨松は大蝦蟇に連れ去られる。（4ウ5オ～5ウ6オ）捨松を連れ去ったのは児雷也で、捨松に黒姫山で長年慣れ親しんだ人たちとの別れを告げさせるためであった。次の日、児雷也は捨松と共に更科家へ向かった。更科家へ到着した**児雷也は更科家家臣で児雷也と敵対していた勇見之助に会い**、捨松をその母美棹から預かった経緯、捨松が荒九郎を討つまでの経緯を説明する。それに対し、勇見之助は児雷也に礼を述べる。そして、児雷也は、以前鎌倉管領の上使比企の蔵人と偽り、**盗みを働いたことを詫びる**。二人は和睦し、酒宴を催す。（9ウ10オ～11ウ12オ）

ロ 順礼お綱はある夜、武蔵野原で一家に泊めてもらう事となった。そこは盗賊の家でお綱は命を狙われる。しかしお綱は勇力をもって盗賊を懲らしめ、彼らを手下とする。（6ウ7オ～9ウ10オ）お綱は盗賊たちと共に、ある長者の家から財宝を奪い、近郷の者たちに分配した。そのことを知った土地の代官である未塵骨平はお綱の行方を尋ねる。（11ウ12オ～14ウ15オ）

ハ 児雷也はある女（実はお綱）と出会ってから、その女のことが頭から離れなかった。ある夜児雷也の枕元に蛇が現れる。それは以前、児雷也を恋慕するあまり嫉妬の想いに駆られて大蛇の霊にとりつかれ、たがねを喰い殺した菖蒲の霊が蛇として現じていたのであった。菖蒲は、児雷也には前世から定まった妻がいることを蛞蝓仙人から聞き、その仙人の力で**成仏した**ことを児雷也へ告げる。（15ウ16オ～18ウ19オ）

ニ 甲斐国黒駒山の盗賊浦不二左エ門一味の動きを牽制するために、勇見之助は信濃と甲斐の国境を巡検していたところ、以前鎌倉で出会ったお綱に再び出会う。／越後の月影家では中老関屋が鎌倉でお綱に救われたことを君主に述べ、月影家で扶持すべくお綱を尋ねるが見つからなかった。／**月影家の田毎姫が奇病に悩まされる**。（18ウ19オ～20ウ）

右記の通り、十一編には大別して四種の話が織り込まれる。以下、イ、ロ、ハ、ニについて前後との関わりを分析したい。まずイについて、児雷也と高砂勇見之助が対面する場面を引用したい。

児雷也は勇見之助に向かひ、「過ぎし頃、当家なる更科判官公、月影郡領と婚姻の事ある折から、それがし鎌倉管領の上使と偽り、姫君を奪ひ、ひそかにその身代はりを送り、館に忍び、かねて望みの軍勢催促の割符と共に尾形の系図を奪ひ取りしは、それがし大望あるゆゑに、たゞ一時の計策を以てかゝる非道を行ひけるに、貴殿の情にて見

逃し給ひ、…身不肖ながらそれがしも仮に山ン賊の張本たる汚れし名をば受けたれども、遠からず立身の事を計りて、世の中の人にも肩を並ぶべし。まづそれまでの手段をばよろしく賢察給はるべし」と、互ひにこれまでの身の落度を語りて、共に詫びにけり。　（十一編10ウ～11ウ12オ）

この話は、十編で描かれた捨松の敵討の続きにあたる。更科家へ移動中の捨松をわざわざ妖術を以て攫い、児雷也自身が捨松を連れて、敵対関係にあった更科家の忠臣高砂勇見之助と対面する。そして児雷也は更科家家臣の姫松家の遺児を育て敵討ちを果たす手助けをしたことを伝えた後に、右のようにそれまで更科家へ行った非道を詫びる。この非道とされる行為は七・八編に描かれた内容であり、

「…それがしかねて月形の印と尾形の系図に心をかけしは、これにて軍勢催促なし、一度越後へ旗揚げして更科家に恨みを報はんとす。そもわれこそは天が下に隠れもなき、仮の名児雷也、真は尾形弘廉が忘れ形見の一子にて尾形周馬弘行これ也」…勇見之介、合図の烽火に遠寄せの館を取り巻く陣鐘太鼓、児雷也彼方をきつと見て、「アノ遠寄せの陣鐘太鼓は、われを取り巻く手配りよな。われかねて鎌倉に身を忍びて時節を待ち、絶えし尾形の家名を立て、旗揚げなして今一度鎌倉管領と合戦して、亡き父弘廉に手向けんと年頃心は砕けども、月形の印手に入らねば、越後の軍勢従はず。わが妖術にてかの品を奪ひ取らんは易けれども、事の実否を質さんため、比企の蔵人と偽り名乗り、上使となりて入り込みたり。…」

（七編16ウ17オ～17ウ18オ）

（鎌倉管領は：稿者注）出口々々に此趣を記せし制札を立て、「盗賊児雷也、真の名は尾形周馬弘行、此者妖術を以て横行し強盗を働く旨、世の聞こえ高く、諸人の難儀ともなる事ゆゑ、ありかを知る者は注進せよ。御褒美を給はるべし。隠し置く者は同罪に行ひ、からめ捕りて出だす者には、とりわき重き恩賞をあて行はるべきものなり」と逐一にふれ示し、近国当国の国主領主、繁華の津は言ふに及ばず、在々浦々までふれ流し、かの制札を立てしかば、

（八編5ウ6オ）

このように『児雷也豪傑譚』八編まで、児雷也はお家再興という名目はあるものの、鎌倉管領や更科家に対峙する盗賊（悪）として描かれ（十六）、お尋ね者とされる程であった。ところが十一編では捨松を育てた上で敵討の助力をしたことを伝え、以前の悪行を詫び、勇見之助と和解する。捨松を育てるという趣向は六編より描かれる内容で、十一編に至り、いきなり和睦するというのは些か性急な感が拭えない。さらに、七編では勇見之助の合図で児雷也が逃げないよう館の周りを取り囲む描写があるが、十一編では勇見之助が情けで児雷也を逃がしたとされるという、細かな内容の齟齬も見られる。これらの描写は、十一編の作者がその後児雷也を善人として描くための下準備のために挿入したのではないだろうか。実際に十三編では、

さても児雷也は、かねてより尾形の家を引き起こさん心の願ひにありしかば、管領に対して功を立て、これを以て亡き父なる尾形左エ門弘澄が汚名を清めんと思ふ折から、甲斐の国の郷土なる浦不二左エ門、鎌倉に背き、黒駒山に山塞を設け立て籠る様子を聞き、これを平らげ管領に心の誠を知らせばやと、まづ姿を変へ、かの辺りの

有様を聞く折から、…かねて更科、月影の両家へ管領より内意下りて、かの海賊大蛇丸、黒駒山なる浦不二らを滅ぼすべき事なるゆゑ、勇美之助はかの島へも忍び〳〵にうち渡り、かしこのさまを窺ふ事あり。さればきつと思ひを凝らし、主君満明に説き勧め、管領へ申なし、「児雷也一つの功を立てなばこれまでの罪をなだめ、尾形の家を再興させん」と認めたる赦し文を請ひ受け…

（十三編17ウ18オ～18ウ19オ）

と勇見之助らの口添えもあり、児雷也は鎌倉管領から赦し文を承け、大蛇丸らを討つために奔走する。このように、児雷也が〈善〉として描かれることによって、十二編以降、大蛇丸・浦不二左エ門を児雷也に対する〈悪〉と描くことができ、新たな善悪の対立の軸を形成することが可能となった。義賊ではあるものの更科家や鎌倉管領家に対峙する悪人であった児雷也を突如善人として描くのは齟齬とも見られかねないため、十一編で勇見之介との和睦を描き、悪のイメージからの移行を試みたものと思われる。ところで、七編の段階では、

又姫松須磨の介が一子捨松成人して敵軍太左エ門を討つまでは事長ければ、まづ今板は此所にて筆を止め、遠からず編を継ぎて程なく出板致すべし。

（七編20ウ）

とあり、捨松が成人してから敵討ちをさせる予定であった。それにも関わらず、何故か十編では急遽、四歳の捨松に敵を討たせ、『自来也説話』由来の話を終結させた。前章の分析からは七編と十編は同じく一筆庵主人の作であるが、何か早く完結させておきたい事情があったのであろうか。これらの記述からだけでは、何故予定を変更してまで、まだ四歳の捨松に敵討ちをさせたかは不明である。ただし、少なくとも十一編で児雷也が勇見之助に謝罪をし、行動を改める旨を伝えたのは、その後に続く、児雷也を善とし、それに対峙する新たな人物を描出する展開への下準備であったと考えられる。

続いて、ロは前後の文脈とはあまり関連のない挿入話である。登場以来豪腕で悪を懲罰する立場であり、十編において児雷也の妻になることを示唆され、蛞蝓の術を授かる綱手が、自ら義賊となる。ただし、後にこの趣向の続きが描かれることはなく、ニで描かれるように、お綱は高砂勇見之助に甲斐と信濃の国境で出会う。この場面ではまだ「お綱が身の善悪は十二編に至りて詳しく知るべし。」（十一編20オ）と記されるのみで、かつ十二編においては「浜辺に立てし辻堂の内より出づる女の順礼、今の様子を聞き知りけん」（十二編12ウ13オ）と大蛇丸と五十嵐典膳の悪巧みを聞いたことを示す文がある。同丁の女順礼の着物の袂に「綱」と印があることから、これがお綱であることが読者に知れ、かろうじて悪に対峙する人物であることが示唆されるに留まる。十二編で善悪を明らかにするとあったがそうなっていないのは、大蛇丸の趣向が延引したため、お綱の記述にまで及ばなかったことが考えられる。

ハは、『自来也説話』からの趣向を引き継いだ〈大蛇〉と〈蝦蟇〉の対決が一応の終結を見る場面である。児雷也は二・三編において、『自来也説話』の自来也と同じく、妙香山の仙素道人を大蛇の脅威から救うため、大蛇を退治する。しかしその大蛇は四編で児雷也に恋慕する菖蒲に憑依する。十編ロ絵では大蛇が女の首を咥えた絵が描かれ、

児雷也が黒媛山の隠家にて傍女たがねを喰殺して弘行の手

に係りし菖蒲の怨霊、大蛇と現じ、嫉妬の燃る火思ひを焦し、瞋恚の刃胸を刺て、蟒身の怪異を以て児雷也を恨むといへども、邪慾の愛情に迫りし妖怪なれば蛞蝓仙人の術にて得脱なし、怨念すみやかに消除す

と記される。詞書きに、蛞蝓仙人の術によって解脱したと結末が明かされるため、ここで一応、蛇の話は一段落してはいるものの、十一編ではこの口絵の内容を詳述する。

…夢ともなく現ともなく児雷也の枕元に、その丈一丈ばかりの蛇が、今切りたるとおぼしく見ゆる女の首を引つくはへて、忽然と現れ出で、児雷也をつれ〳〵と恨むる有様なり…これを見れば、過ぎし年、嫉妬のために図らずも狂気なしたる、かのたがねが食らひ殺せしあやめの首にありければ、…蛇はたちまち人語を出だし、「…蛞蝓仙人の教諭にて、御身には前の世より定まれる縁ある妻を此度迎へ給ふ天縁あれば、諦めよ、われ結縁して仏果を得させ永く成仏さすべしとて、極楽往生なすにつけ、浅ましけれどもこの姿を仮にこの世に現して、未来の懺悔を告げ参らす。かくては恨みも解け侍れど、たゞ恥づかしき蛇形の姿は罪障消滅の因縁なり。あら嬉しや」と言ふ声ともに、蛇の姿もあやめの首も五色の雲に覆はれて、仏の姿と見えけるを…

（十一編16ウ17オ～17ウ18オ）

この記述で注目したいのは、十編の口絵の内容を補完した内容であるにも関わらず、大蛇の怨霊となったのが菖蒲ではなく多金と、登場人物名が逆となっている点である。右記の引用箇所からも分かるように、十一編での名前の登場箇所全てで逆転しており、単なる間違いではなく、作者が両者を逆に捉えていたと言える。十編では「菖蒲の怨霊」とあることから、十編の作者は両者を逆には捉えていないようだ。この点からも十編の作者とこの箇所を描いた作者は別人であった蓋然性が高い。

最後にニに関しては、田毎姫に関する箇所を中心に考察したい。田毎姫は更科家の息女で鎌倉管領の計らいで月影家の子息深雪之介と婚姻した。七編において初めて登場し、同編の口絵にも描かれる。そこには児雷也、蝦蟇、大蛇も同画面に記され、物語に深く関わってくるのかと思いきや、七編以後、十一編20オに描かれるまでほぼ登場しない。十一編19ウ20オの絵の説明には

月影家の内君（田毎姫：稿者注）、奇病を悩給ふにより、更科家より照田を使として安否を問しむ事は次の篇に見えたり

（十一編19ウ20オ）

とあり、20ウには「〇月影家の舘に怪き妖気立升る」とある。この流れから田毎姫の病の原因が怪き妖気であることが暗示される。十二編には

（大蛇丸は：稿者注）田毎姫の女中に混じり磯辺に立ちし姿を見て、もとより蛇身の性を受け、あくまで淫心深ければ、たちまちに懸想なし、「あら美し」とそゝろ立ち、「かゝる美人は世の中に又ありとも思はれず、いで奪ひ取つて隠れ家へ連れ行き、思ひのまゝに楽しまん」

（十二編11ウ12オ）

と、大蛇丸が田毎姫に懸想する様子が描かれ、

『この煩ひは物の怪の祟りにて、姫に深く執心なす妖魔のものゝなすわざなれば、医師の力にいかで及ばん。災ひを避けんとならば、世に類なき名剣を臥所に置いて守

とせば、たちどころに全快すべし』…深雪之助はかくと聞きて、「そは安からぬ事になん。されども幸ひ、わが家に伝来なす名剣あり。大和の住人天国が鍛い上げし短刀にて、焼き刃に自然と蛞蝓の形現るゝゆゑをもて、蛞蝓丸と呼び来たれり…」　（十二編13ウ14オ）

田毎姫の病には短刀が守りになるとのお告げを得る。この田毎姫の病の真相については二十編で明かされる。

「…『（田毎姫の：稿者注）御悩みの様子を考うるに、全く病のわざならず。物の怪の障碍にして、しかもなか〳〵たやすくは退くべきとも思はれず。…』…ある夜、わが枕辺に見知らぬ男女来たりて告ぐるは、『君、さま〴〵に労し玉ふ御主君の姫君の御病気の起こる所は、己らがために身の仇たる大蛇丸と言へる悪賊の、内君を見初め参らせ、思ひをかくるによりてなり。…思ひの念はあくまで深く、その身は他国にありながら、心は夜ごとに内君の御寝所近く窺ひ寄り、隙を得ば己が思ひを晴らさんと図れども、…』　（二十編5ウ6オ～6ウ7オ）

以上の通り、十一編では田毎姫が病気になったことが描かれる。その直後の十二編では大蛇丸が田毎姫を見初める場面や田毎姫の療治のために「蛞蝓丸」いう短刀が必要であることが描かれ、二十編で田毎姫の病気の原因は大蛇丸が田毎姫に懸想した事が原因であることが明らかになる。十二編の時点で蛇に打ち克つ蛞蝓丸という短刀が登場することで、田毎姫もまた三すくみの構想の内に組み込まれ、綱手との関わりが深くなる予定であることは想像に難くない。実際に十四編の口絵では綱手が大蛇丸に向けて短刀を振り下ろす姿が描かれており、大蛇丸は田毎姫目掛けて襲って来る様子であるため、綱手が田毎姫の用心棒となる構想はこの頃からあったのであろう。それらの例より、十一編20ウの「怪き妖気」は大蛇丸の心が夜毎に寝間に忍んでいたことをあらかじめ暗示していたのではないだろうか。無論、種員がこの趣向に合わせて十二編以降を書き継いだことも考えられる。しかしながら、刊行までの期間や十一編の他の記述をも勘案すると、「妖気」といった大蛇丸を既に念頭に置いているかのような設定であることから、これは十二編以降の作者である種員が施した伏線であると考えられるかもしれない。

また十一編末には

○是より末、月影更科両家の事、児雷也、お綱、捨松の物語は十二編より十三編に至りて詳しく解き分くるを聞き給ふべし。　（十一編20ウ）

と今後の予告まで行う。もしこの文章が一筆庵主人の遺稿に基づくものの場合、一筆庵主人の没後に校正が行われており、この文章を削ることもできたはずだが、そうしていないのは、この文言を書いた人物が校正も行ったと考える方が自然であろう。さらには、『児雷也豪傑譚』の他の編におけるその後の展開予告を列挙してみると、

・又姫松須磨の介が一子捨松成人して敵軍太左エ門を討つまでは事長ければ、まづ今板は此所にて筆を止め、遠からず編を継ぎて程なく出板致すべし。　（七編20ウ）

・…恐れおのゝき、舌を巻かぬはなかりけり。これより九編に詳しく記せり。　（八編20ウ）

・○此順礼は善か悪か、奥女中関屋が危難のくだりに到り

て氷解すべく、又児雷也が捨松に敵荒九郎を討たする事、甲斐の浦冨士左エ門の討手に向かひし児雷也が働きの事は、次々の巻を見て詳しく知るべし。　（九編20ウ）

とある。笑顔から一筆庵へ作者が交代したとされる六編には次編予告はなく、また八編では書ききれなかった箇所を次編に廻すという書き方になっている。さらに、七・九編では「次編」などと編を明示することを避けている。七～九編における「予告」には具体的な記述は見られず、その編における話が延引する場合はそのことを示すに留まる。一方、十一編においてはそれが実際に描かれたかは別として、十二・十三編までの構想を示している。これは例えば柳下亭種員が『白縫譚』の奥目録において次編以降のあらすじを詳細に著す態度と通じるところがある。後の編との繋がり、予告の書き方などから、十一編で何らかの形で柳下亭種員が作に関わり、伏線を敷いていた可能性が考えられるのではないだろうか。

おわりに

本稿は先行研究でも見解が異なる『児雷也豪傑譚』における一筆庵主人の嗣作時期の検討を美図垣笑顔の記述との齟齬から検討した。結果、六編は美図垣笑顔の遺稿がそのまま用いられているであろうこと、七編は遺稿を踏まえた可能性もあるが、一筆庵主人が加えた新たな記述も多分に含まれていることを述べた。この七編には齟齬のみならず、人物名の誤りも複数見られた。一方、一筆庵主人の没年月が明確で作品中にも生前成稿の旨が記されることから、没後に刊行された十、十一編の作者は従来問題視されていない。一筆庵主人自筆の稿本が残る十編は内容的な異同はないため一筆庵作と言えるが、十一編には前述の七編と同様に登場人物名の間違い、十編と十一編間での登場人物名の逆転が見られる。これらの誤りを含む箇所は遺稿に依らない新たな記述で、一筆庵主人とは別人物が加えた可能性が考えられる。そこで十編以前と十一編の間に内容的な齟齬がないかを検討した。明確に指摘できる齟齬はわずかであったが、十一編の内容が十二編以降の新たな趣向の創出の礎だと考えられる箇所もあり、十二編以降はそれらを丁寧に作中で取り上げながら物語を書き嗣いでいる。すなわち、十一編で齟齬や誤りが見られる箇所などを含め、柳下亭種員が十二編以降の新たな趣向のために既に制作に携わっていたことが考えられる。

種員の嗣作の姿勢は『児雷也豪傑譚』二十編序文に見られたように、前作者二人の間に生じた齟齬を指摘出来るほどに作品を読み込んでいたことに表される。ただし、一筆庵主人の没後、刊行までの限られた時間では作品を熟読することも叶わなかったであろう。そう考えると、十一編に見られる趣向も種員による趣向だとしても問題がないと考えられる。十二編から種員が大蛇丸の趣向を導入できたのは、まだ種員の名が出ていない、十一編より下準備を行っていたからではないだろうか。

本稿では『児雷也豪傑譚』という幕末の人気長編合巻を基に、内容面から分析し、どの編が誰の作であるかを検討した。これにより、幕末の長編合巻において表出される作者名と実際の作者が異なる可能性があることも明らかになった。長編合巻を論じる上で各作者の趣向を問題にする際には、作者の検討も入念に行う必要があるだろう。

［付記］

本稿は、日本近世文学会平成二十九年春季大会での発表に基づく。席上ご教示下さった先生方に感謝申し上げます。

なお、本稿で用いた『児雷也豪傑譚』本文の引用は服部仁・佐藤至子編『児雷也豪傑譚』（国書刊行会　2015 年）の翻刻に基づき、その他の引用も含め、私に傍線などを付した箇所がある。

［注］

（一）一番目の作者美図垣笑顔が三編序文に「嚮（さき）に漫亭鬼武主人に自来也説話あり」と記すことからも読本『自来也説話』との関係は自明である。

（二）『自来也説話』前編の口絵に描かれる人物とそれに対応する『児雷也豪傑譚』の登場人物との対照［1］（一致箇所には‥‥、名前以外に異なる箇所は太字で示す）とあらすじの対照［2］（傍線・太字は人物対照に同じ。また、対応する箇所にアルファベットを付した）を本稿末に掲げる。

（三）服部仁・佐藤至子編『児雷也豪傑譚』（国書刊行会　2015 年）。

（四）佐藤至子「『児雷也豪傑譚』における蛇の物語」『日本文学』第 62 巻第 4 号　2013 年 4 月。

（五）小池藤五郎「児雷也豪傑譚」『日本文学大辞典』（新潮社　1933 年）。

（六）鈴木重三「児雷也豪傑譚」『日本古典文学大辞典』（岩波書店　1984 年）。

（七）同注（三）。

（八）五編の書誌に関しては鈴木重三『改訂増補　絵本と浮世絵――江戸出版文化の考察』『児雷也豪傑譚』書誌考」（ぺりかん社　2017 年）に詳しい。

（九）・（児雷也は：稿者注、以下同）わが腰の印籠取りて非人ゝ（実は勇見之助）に与へ、…（二編 13ウ 14オ）

・（児雷也は）しきりに癪気起こり、…（我毛六、実は勇見之助は）「…われ〳〵良き薬を持てり。これ飲みて見給はずや」と一ツの印籠さし出だせば、児雷也取つて押し頂き、…（児雷也）「その印籠が又元へ蛙の根付、高蒔絵の富士越し龍はわが好み」…（五編 5ウ 6オ～6ウ 7オ）

・勇見之介が懐中より取り出だしたる蒔絵の印籠、…（児雷也）「ヤ、こりやこれ、いつぞや信濃路で病に苦しむ野伏せりに、薬と共に与へたるわが見覚への此印籠」（七編 15ウ 16オ）

（十）・美棹は痛手に弱りながらも、討たれし梢が死骸の側へ…（六編 16ウ 17オ）

・（児雷也）「亡き親夫婦のみならず爺の敵を討たせばやと、われ鎌倉にその孤児と姫松枝之進殿の妻梢と言へる、老母を忍ばせ養ひ置きたり。」（八編 7ウ 8オ）

・その首（美棹）虚空を飛び廻れば、これに続いて枝之進の首、須磨太郎の首、梢、松平の首残らず現れ、もろともに飛び廻り、…（十編 13ウ 14オ）

（十一）・筑紫に名高き尾形の左エ門弘澄（二編 12オ）

・（越後の月影深雪之介）「もと当国は尾形弘廉の領地にして、…」（七編 15ウ）

・肥後国八代郡興正寺山の城主尾形左エ門弘澄公（十八編 5ウ）

（十二）・（荒九郎は）吹雪肩衝の茶入を盗み、ひそかに鎌倉を逐電なし…（二編 19オ）

・（児雷也は）更科家の重宝なる吹雪肩衝と名付けし茶入、わが手に入りし事のあれば、…漏るゝ事なく書に認め、茶入に添へて更科家なる勇美之助が方へ送りければ、…（十三編17ウ18オ～18ウ）

・悪魔婆は起き返り、庖丁持つて行灯を打ち返しつゝ闇に紛れて、いづくともなく逃げ去りける。（五編10オ）

・（老女）「…悪魔のお強と世にうたはるゝほど悪業の入りぬいたわたしが体…」（十二編16ウ17オ）／…お強はじつとうち笑ひ、われから刃抜き取りて、眠るがごとく息絶えたり。（十五編10ウ）

（十三）請求記号　913.64-イ 17。『天理図書館稀書目録和漢書之部第一』（天理図書館　1940 年）には「美図垣笑顔著自筆　一筆庵主人序　自画」とあるが、美図垣笑顔はすでに死没のため、全編一筆庵主人の筆によるものと考えられる。

（十四）稿本における本文文字数が約一六〇〇〇字、刊本において削除、挿入、置換が行われた文字数が約三六〇〇字（置換の場合は置換後の文字数）である。

（十五）拙著「『青陽石庁礎』二、三編の校閲について」『京都大学國文學論叢』41 号　2019 年 4 月。

（十六）この趣向の元にあたる話が『自来也説話』の後編にあり、自来也の悪賊としての非道が強調されて描かれる。

（おおぜき　あや・本学非常勤講師）

［注（二）対照表］

［1］『自来也説話』前編

自来也（黒姫山の盗賊、尾形家の遺児）

衣重（清野→早枝）
（源太郎の妻。軍太夫に恋慕される。軍太夫に返り討ちにあう）

勇源太郎
（椎津家の家臣。軍太夫に殺される）

万里野破魔之助
（**仁木家**の忠臣。自来也を付け狙う）

鹿野苑軍太夫→五十嵐典膳→鬼頭剛右エ門
（**元盗賊**。椎津家の悪臣。後に剣術師範となる）

勇侶吉郎
（自来也に**拾われ**、養育された。**美鳥と共に両親等の敵を討つ**）

美鳥

［1］『児雷也豪傑譚』

児雷也（黒姫山の盗賊、尾形家の遺児）

美棹
（須磨太郎の妻。荒九郎に恋慕される。軍太左エ門に返り討ちにあう）

姫松須磨太郎
（更科家の家臣、荒九郎に殺される）

高砂勇見之助
（**更科家**の忠臣。児雷也を付け狙う）

荒九郎→夜叉五郎→軍太左エ門
（更科家の悪臣。**後に盗賊**、また後に剣術師範として**鎌倉管領家に仕える**）

捨松
（児雷也に**救われ**、養育された。**わずか四歳で両親らの敵を討つ**）

なし

［2］『自来也説話』前編

盗賊であった軍太夫[A]が源太郎の父を殺害する。その時に抱えられていた**子どもは崖から落ちてしまうが木に掛かって命は助かった**。見つけた自来也[B]がその子を拾い、養育する。一方、椎津[C]家に召し上げられた軍太夫は同家の家臣源太郎を、邪魔であったために殺害する。そしてついでに源太郎[D]の妻衣重を我がものにしようと企んでいた。夫が殺された[E]ことを知った衣重は源太郎の敵討ちをしようとして、軍太夫に返り討ちにあう。十六年後、自来也に育てられ、大きく成長した侶吉郎[F]は源太郎に恩のある**美鳥とともに**、自来也の力も借りて、軍太夫に敵討ちを果たす。

［2］『児雷也豪傑譚』

荒九郎[a]の**弟**が須磨太郎の父を殺害する。ほぼ同時期に更科家の荒九郎は須磨太郎を殺害する。それは荒九郎が須磨太郎の妻美棹に恋慕していたためであった（初編下）。須磨太郎の妻美棹は**須磨太郎の母梢、家臣の松平**とともに敵討ちの機会を伺っていたが（三編～六編）、**松平は梢の眼病を治すために生肝を差し出し、自害したため、梢は回復した**（六編上）。しかしその後美棹[e]と**梢**は軍太左エ門（荒九郎）に返り討ちにされる（六編下）。そこに、通り掛かった児雷[b]也が**美棹から子どもを預かり**、養育することとなった[f]（六編下）。その三年後、児雷也は**まだ幼い**捨松の助力をし、捨松は軍太左エ門への敵討ちを果たす（十編下）。